

2025年度大学入門ゼミ・学科基礎ゼミナール推薦図書 (現代社会学科向け)

1. メディア文化メジャー

★入門

書名	メディア文化論 改訂版		
著者	吉見俊哉	刊行年	2012年
出版社	有斐閣アルマ	価格	1,800円
コメント	メディア文化研究についての入門書。新聞、電話、映画、テレビなど様々なメディアについてのこれまでの研究動向が、平易な文章で解説されている。		

★入門

書名	最新版 大学生のためのレポート・論文術		
著者	小笠原喜康	刊行年	2018年
出版社	講談社	価格	800円
コメント	世の中に数多出版されているレポート・論文の書き方本のひとつですが、この本の特徴は、類書がどうしてもレポート・論文の内容についての記載に重点を置くのに対して、(それも勿論書かれています)その一歩前の形式上の書き方の部分(例えばカッコの使い方のような)にもきちんと力をいれてくれているところです。 特に最初の1・2章の部分はそうで、レポート・論文の書き方としては基本中の基本のことですが、案外に上位学年になってもできていない人が少なくないことについて、きちんと書いてくれています。 「レポート・論文はこれ一冊あれば大丈夫」という本ではないかもしれませんが、「せめて、少なくとも、このくらいのことは踏まえておいて欲しい」、という(大学教員が日頃思っているような)内容が書かれています。 やはり大学生向けのレポート・論文の書き方本の名著として多くの学生に読みつがれている、戸田山和久先生の『最新版 論文の教室:レポートから卒論まで』(NHK出版)などと併読すると良いと思います。		

★入門

書名	基礎からわかる論文の書き方		
著者	小熊英二	刊行年	2022年
出版社	講談社(現代新書)	価格	1200円
コメント	長年大学初年次学生のレポート執筆の友として売れ続けていた小笠原先生の『大学生のためのレポート・論文術』ですが「最新版」を最後に今後は改訂されないようです。一方、同じ講談社(現代新書)のシリーズには、2022年にこの『基礎からわかる論文の書き方』が登場しました。『大学生のためのレポート・論文術』とは方向性の違うものだと思いますが、この本もまた、大学生になったら、できるだけ早い時期に一度は目を通しておくことを強くお勧めします。レポート、論文とは何のために書かれるのか、その書き方にはどのような理由があるのか、といった「論文とは何か」(同, p.3)から詳しく書き起こされています。実物を見ると、そのページ数に怖気づいてしまうかもしれませんが、各章の冒頭には「ポイント」、各章のおわりには「まとめ」があり、また随所に教員と学生との仮想対話も差し込まれていて、読みやすく、分かりやすい内容になっています。「その厚みにビビったけれど、気がついたら読み終えていた」となるような本です。著者の小熊先生は社会科学系の研究者ですが農学部出身でもあり、理系・文系の両方の論文の書き方に通じていて、その意味でもバランスのとれた論文の書き方本になっていると思います。		

★入門

書名	アイデアのつくり方		
著者	ジェームス W.ヤング	刊行年	1988年
出版社	CCCメディアハウス	価格	800円
コメント	広告の世界で働いていた著者が、そのキャリアの中で見出した「アイデアの生み出し方」の極意について書いた本です。 原著の初版は1940年、日本語版も1988年と、ずいぶん昔に出版された本ですが、今も色褪せないアイデアを生み出すための王道が書かれています。 アイデアを生み出す方法について書かれた本はたくさんあり、どの本にも学ぶべきことはあると思いますが、まずは、この1冊から読み始めるのが良いと思います。アイデア本の著者たちも、日夜仕事のためにアイデアを生み出すために呻吟している多くの方たちも、この本に書かれていることには、皆、賛同するのではないかと思います。 ページ数も少ないコンパクトな本です。是非一読されることをお勧めします。		

★★基礎

書名	インターネット文明		
著者	村井 純	刊行年	2024年
出版社	岩波書店(岩波新書)	価格	960円
コメント	インターネットがどのようにして現代社会の情報基盤となり、趣味や仕事から医療や安全保障までを包摂する「文明」と化したかを丁寧に解説した一冊です。著者は日本におけるインターネットの第一人者であり、その歴史的背景や技術的進化、現在そして未来の課題について詳述しています。まさにデジタル社会の理解を深めるための必読書の一つです。		

★★基礎

書名	八月十五日の神話 終戦記念日のメディア学		
著者	佐藤卓己	刊行年	2005年
出版社	ちくま新書	価格	861円
コメント	「終戦記念日」といえば8月15日である。1945年のこの日、ラジオを通じて天皇の朗読(玉音放送)が流された。しかし、放送後にも空襲はあったし、武装解除や降伏文書調印はまだ終わっていなかった。ではなぜこの日が「終戦記念日」なのか？そこには戦後のジャーナリズムが深くかかわっている。メディア史・メディア論の真髓が味わえる名作。		

★★基礎

書名	デジタルゲーム研究入門 レポート作成から論文執筆まで		
著者	小林信重(編)	刊行年	2020年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2,800円
コメント	ゲーム研究の入門書として書かれていますが、「第2章 研究の進め方・準備編」「第3章 研究の進め方・執筆編」「第4章 ゲーム研究の方法」については、ゲームに直接関心のない人にとっても、論文の書き方や研究のための技法についての簡便な解説になっているので、参考になると思います。 また、第5章では、実際のゲーム研究論文を例に取り上げていて、どのような方法で、どのような問いに対して、どのように答えを出していくのかについての感じをつかむことができるようになっています。 ゲームに興じている方は多いと思いますし、それを研究対象としたいと考えている方も少なくないと思います。そういう方は、是非手にとってみてください。		

★★基礎

書名	アイドル・スタディーズ：研究のための視点、方法、問い		
著者	田島悠来(編)	刊行年	2022年
出版社	明石書店	価格	2,400円
コメント	アイドルを社会的に考えるとはどういうことかを、豊富な事例から学べる初学者向けの本。労働者としてのアイドル、恋愛禁止とは何か、男装アイドルの意味、自己啓発的な歌詞、同人誌、チェキ、台湾ジャニーズファン、東南アジアの日本型アイドル、日韓合同K-POPオーディションなど、アイドル文化をめぐる幅広いテーマを扱っている。		

★★基礎

書名	平成テレビジョン・スタディーズ		
著者	太田省一	刊行年	2019年
出版社	青土社	価格	2,000円
コメント	テレビがもっとも成熟していた平成時代のさまざまな番組や出演者たちを、独自の視点から社会的に考察した一冊。紅白歌合戦、路線バスの旅、散歩番組、SMAP×SMAP、女子アナ、タモリ、山田孝之など、16篇から成る論考は平易で、テレビを論じるとはどういうことかを分かりやすく知ることができる。		

★★基礎

書名	最新版 論文の教室：レポートから卒論まで		
著者	戸田山和久	刊行年	2022年
出版社	NHK出版	価格	1,400円
コメント	レポート・論文の作成のための出発点である問いの立て方から、アウトラインの作り方、実際のレポート・論文のための文章の作り方まで、学生と先生の対話のスタイルで分かりやすく説明してくれています。 特にアウトラインをどうやって育て、膨らませていくのか、という部分は分かりやすく、有用だと思います。(もちろん、その他の部分も役に立つ情報満載ですが。) 小笠原先生の『最新版 大学生のためのレポート・論文術』でまず、小学校・中学校の頃から学んできたはずの「文章の書き方」を再確認し、次に小熊先生の『基礎からわかる論文の書き方』で研究者・科学者が書く論文とは何なのかについてを学び、この『論文の教室』やヤングの『アイデアのつくり方』で、着想をどのように得るのか、そしてそれをどのように体系だった構成に育てていくのかを学ぶ、というのを、大学初年次に体験しておくのは、良いことだと思います。		

★★基礎

書名	テクノ・リバタリアン 世界を変える唯一の思想		
著者	橘玲	刊行年	2024年
出版社	文藝春秋(文春新書)	価格	900円
コメント	この本の主な登場人物はテスラのイーロン・マスク、ベンチャー投資家ピーター・ティール、オープンAIのサム・アルトマン、イーサリアムのヴィタリック・ブテリンといった人たちです。 世界を動かし、人間の未来をも決めてしまいそうな勢いのこうした人達は、一体何をどう考えて行動しているのでしょうか、かれらの行動原理は何なのでしょう。 そうした疑問を持ったならば読んでみると面白い本だと思います。 この本の中で描かれる現在と未来をどのように自分は捉えるのか、例えば肯定するのか否定するのか、否定するのであればそれはどのような道であれば良いと考えるのか、そもそも、今の人間にそれを否定する道は残されているのか、...、メディアというものを考える上でも重要な、問いを得られるのではないかと思います。 内容は意外に重いですが、厚みは通常の新書本です。書店や図書館で見かけたら、一度手にとって眺めてみると良いと思います。		

2. 国際・地域共創メジャー

★入門

書名	最新版 大学生のためのレポート・論文術		
著者	小笠原喜康	刊行年	2018年
出版社	講談社	価格	800円
コメント	レポートや論文を書くためのマニュアル本として優れている。ベストセラーのひとつで、コンパクトだが卒論まで網羅しており、最低限これだけは手元に置いておきたい本。		

★入門

書名	よくわかる社会学 第3版		
著者	宇都宮京子・西澤晃彦	刊行年	2020年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2,500円
コメント	社会学の全体像を理解することに有用なテキスト。そのために、まずは目次を眺めてみるほしい。また、各トピックについて、基本的に見開き2ページないし4ページの分量でまとめられており、注釈がページの左端ないし右端にあるデザインも、よく易くてよい。		

★入門

書名	統計学入門 データ分析に必須の知識・考え方		
著者	阿部真人	刊行年	2021年
出版社	ソシム	価格	2,500円
コメント	データ分析で実際に活用するという観点を前面に出した統計学のテキスト。分析結果の適切な読み方を学び、なぜ統計学を学んだ方がいいのかということを理解するのに有用。高校数学の内容の復習にも活用できる。		

★入門

書名	ジオグラフィー入門 改訂新版		
著者	高橋伸夫ほか編	刊行年	2008年
出版社	古今書院	価格	2,500円
コメント	まちづくり、観光、大震災、新幹線、サッカー、カーリなど、31のさまざまな面白いトピックから構成される本書は、皆さんが考えている「地理」のイメージをガラッと変えることでしょう。大学で学ぶ地理学は高校で学ぶ「地理」とは異なり、さまざまな事柄が対象であり、答えがまだ見つかっていない社会の問題に挑んでいく学問です。高校で「地理」を選択しなかった人にもわかりやすい内容で、大学で学ぶ地理学の一端を紹介していきます。		

★入門

書名	最底辺のポートフォリオ 1日2ドルで暮らすということ		
著者	J・モーダックほか著 野上裕生監修 大川修二訳	刊行年	2011年
出版社	みすず書房	価格	3,800円
コメント	途上国の貧困問題に対する世界的な注目と「ミレニアム開発目標」から「持続可能な開発目標」に至る国際的な取り組みの中で、1人あたりの収入が1日2ドル未満という数字も貧困者を定義する世界的基準として広く認められるようになってきた。では、世界で7億4千万人近くを占める貧困者の人々はどうのような暮らしを送っているのだろうか？ 私たちには実際問題なかなか想像もできない貧困層の暮らしを、本書は貧困層に対する丁寧な聞き取りや家計日誌の記録を通じて浮かび上がらせる。単に「少額」なだけでなく、「不安定」や「予測不可能」といった収入の問題、また、貧しいゆえに人々が編み出した創意工夫や支出における優先順位の付け方など、机上の議論だけではわからない貧困者の暮らしが、「目からうろこ」を含めてわかる本。援助実務者や開発分野の研究者の間でも話題となった、「貧困問題について理解を深める本」である。		

★入門

書名	なぜ貧しい国はなくなるのか 正しい開発戦略を考える		
著者	大塚啓二郎	刊行年	2014年
出版社	日本経済新聞社	価格	2,800円
コメント	『「経済発展は途上国にとって望ましいのか」という疑問をもつ人が少なくないようだが、そうした方々には、現地を訪問することをお勧めしたい。所得が低く、貧困であることが、どれほど厳しいことかを身に染みて感じるができるであろう』という著者の言葉は、国際協力に現場で携わってきた多くの者には共感できるものである。だが、開発途上国を見ると、経済発展が進み人々の所得の増大や生活の質につながってきている国、経済発展は進みつつあるが格差と不平等を広げている国、経済発展からは程遠く停滞と貧困の中にある国とさまざまな状況にある。同じ途上国で、歴史や国際的におかれた位置づけも似たような国でも、開発がうまく行っている国とそうでない国の違いはどこにあるのか？ 国際協力の実務者や研究者が誰も抱くこの問いに、本書は一つの答えを示す。開発経済分野で35年以上の研究歴を持つトップクラスの研究者で、途上国開発の現場にも詳しい著者が、これまでの途上国開発戦略に見られた間違いや取り組むべき政策について「暖かい心と冷静な頭脳」でまとめた本。貧困削減に向けた農業開発や産業開発など、包括的な経済開発戦略の分析と提言は、途上国を知る実務者にも「なるほど納得」と思える内容となっている。開発経済学というと難しそうだが、初心者にもわかりやすい政策論であり、開発について理解を深めたい人にはおすすりである。		

★入門

書名	新・世界経済入門		
著者	西川潤	刊行年	2014年
出版社	岩波新書	価格	1,015円
コメント	国際開発学会会長もつとめられた、開発経済学、国際経済学の泰斗によるベストセラー。国際学分野を志す学生には、世界経済への理解は不可欠であり、格好の入門書。		

★入門

書名	国際開発学入門 開発学の学際的構築		
著者	大坪滋、木村宏恒、伊東早苗	刊行年	2009年
出版社	勁草書房	価格	3,564円
コメント	国際開発学会特別賞受賞の、日本語で読める国際開発学の最良のテキスト。日本を代表する当該分野の大学院である、名古屋大学大学院国際開発研究科の教員が中心で執筆。開発経済学、開発政治学、開発社会学の三本柱を軸に、農業・農村開発、教育・人材開発、平和構築、環境等を学際的にカバー。タイトルは「入門」だが、専門科目のテキスト・参考文献として十分な内容。		

★入門

書名	Culture Bound		
著者	Joyce Merrill Valdes (Editor)	刊行年	1986年
出版社	Cambridge University Press	価格	3,200円
コメント	Contains various essays regarding intercultural communication with a focus on the interrelationship between language and culture. The essays highlight the importance of being aware of cultural differences when communicating with someone from a different culture.		

★入門

書名	多文化社会と異文化コミュニケーション		
著者	池田理知子	刊行年	2002年
出版社	三修社	価格	2,520円
コメント	異なる文化を持つ人たちとのコミュニケーションが日常的に増加しつつある現代、地球規模で物事を考えることがますます重要となっている。この本では、異文化コミュニケーションを多面的に捉え、様々な文化をグローバルな視点で考える。時間・空間に関する認識の違いから異文化コミュニケーションを考え、さらにマスメディアの影響、障害者や高齢者とのコミュニケーション、女性の異文化への適応についても考察している。		

★入門

書名	異文化理解		
著者	青木保	刊行年	2001年
出版社	岩波新書	価格	735円
コメント	筆者がタイを始めとして世界各地、日本各地で体験したこと、見聞きしたことなどをもとに、「文化」や「異文化理解」、あるいは文化・異文化に関わる問題などについてわかりやすく語られています。		

★入門

書名	社会学入門		
著者	筒井淳也・前田泰樹	刊行年	2017年
出版社	有斐閣	価格	1,900円
コメント	「出生」「学ぶ／教える」「働く」「結婚・家族」「病い・老い」「死」といった生きていくなかで経験する出来事を各章のテーマとして、それを社会学の見方で理解するとどうなるか、解説している。だれにとっても身近なテーマなので、入門書として最適である。また、異なるデータ分析の方法を専門とする2人の著者が各章の前半と後半を分担しており、アプローチの違いによる社会の見え方の違いを理解するのに適した書籍である。		

★入門

書名	社会学ワンダーランド		
著者	山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹 編著	刊行年	2013年
出版社	新世社	価格	2,600円
コメント	東京大学で2010年度に開講された全13回の学術俯瞰講義がもとになっている。そのため、これまで社会学にふれたことのない人でも、読みやすい文体になっている。掴みどころのないように見える社会学という学問をのおもしろさを、「社会学者が使う、『不思議な方法』や『独特な技』」(同書vページ)、すなわち「ワンダー」を捉えることから理解させてくれる。		

★入門

書名	基礎から学ぶ社会調査と計量分析		
著者	林雄亮・石田賢示	刊行年	2017年
出版社	北樹出版	価格	1,800円
コメント	社会学分野で実証研究を展開していくために必要な知識を易しく解説したハンドブックとされているが、実は、社会学分野以外の初学者にとっても非常に有益な内容となっている。例えば、研究の心構えや研究テーマのみつけ方、問いや仮説の設定、先行研究へのアプローチに関する基本的なコツを紹介しており、大学1年生ができるだけ早い段階で購入して手元に置いておきたい書籍である。全58章から構成されているが、1つのトピックが1章2ページでコンパクトにまとまっている点も、本書の魅力である。		

★入門

書名	社会学用語図鑑		
著者	田中正人ほか	刊行年	2019年
出版社	プレジデント社	価格	1,800円
コメント	重要な社会学者や社会学用語について、イラストをふんだんに使いつつ説明がされている。社会学者の部分には、関係の深い「エリア」(出身地など)や「アイテム」、その社会学者を象徴する「セリフ」といった情報が載っており、理解しやすい。社会学用語については見開き2ページの中に、その意味、関連文献、追加情報のメモと、イラスト中心の解説がまとめられており、要点を押さえるのには最適である。本書で社会学を概括的に理解したのちに、気になる社会学者や社会学用語について、原典・専門書を手にとるとよいだろう。		

★入門

書名	社会学をつかむ		
著者	西沢晃彦、渋谷望	刊行年	2008年
出版社	有斐閣	価格	2,300円
コメント	社会学はその対象として「社会」を扱う学問であるが、そもそも私たちは日常的に社会とどのようにかかわっているのか。そのかかわり方について、「社会につながる」「社会に組み込まれる」「社会を生きる」「社会に統制される」「社会に居場所を探す」「社会と向き合う」という本書の章立てにより、複数の側面から考えることができるだろう。		

★入門

書名	社会学入門		
著者	見田宗介	刊行年	2006年 (2017年第6章改訂)
出版社	岩波書店	価格	860円
コメント	著者がこれまで各所で現代社会について論じてきた内容がベースとなって構成されており、いわゆる学問についての体系的・概論的な教科書ではない。しかしながら(であるからこそ?)、著者・見田宗介氏による社会学は、その文体も相まって、読み手である私たちを社会学にぐいぐい惹きつけていく。社会学に初めて関心をもった際、まずはそのおもしろさを、本書で掴んでほしい。ISBNは変更ないが、2017年2月刊行14刷より第6章が全面改訂されている。著者の社会学に魅力を感じたら、同じ岩波書店から出版されている著作集(『定本 見田宗介著作集』『定本 真木悠介著作集』)を手にとるのもいいだろう。		

★入門

書名	マンガでわかる社会学		
著者	西田亮介監修	刊行年	2023年
出版社	池田書店	価格	1,500円
コメント	各登場人物が抱えた生きづらさに対して、社会学という学問がどのような視点をもたらすかということから、社会学を知るための入門的な一冊。		

★★入門

書名	よくわかる異文化コミュニケーション		
著者	池田理知子編	刊行年	2010年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2,625円
コメント	異文化とメディアに関する総合的入門書としてふさわしい。		

★★入門

書名	SDGs（持続可能な開発目標）		
著者	蟹江憲史	刊行年	2020年
出版社	中央公論社	価格	920円
コメント	SDGs研究の第一人者であり、政府のSDGs円卓会議メンバー等もつとめるSDGsの入門書。SDGsの概要や特徴、国際社会の議論等をふまえて、経済・社会・環境の統合的な目標である17目標について、ターゲットも踏まえて概説。さらに、企業や自治体の取り組み等についても具体的に説明されている、SDGsに関心のある学生の必読書。		

★基礎

書名	社会にひらく 社会調査入門		
著者	文貞實ほか編著	刊行年	2023年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2,800円
コメント	実際に社会調査を行う際に生じる問題について、一步踏み込んで理解するための教科書的な一冊。		

★基礎

書名	最新・社会調査へのアプローチ		
著者	大谷信介ほか編著	刊行年	2023年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2,500円
コメント	社会調査の解説書のうちポピュラーな一冊。社会調査をめぐる最新の問題、世の中の動向を踏まえて改訂されており、大学で学ぶ調査・研究法について理解する際、この最新版の内容をおさえておく必要がある。		

★基礎

書名	〈わたし〉から始まる社会学		
著者	平井晶子ほか編	刊行年	2023年
出版社	有斐閣	価格	3,600円
コメント	個人的なことが社会的なことにつながるという対象のおもしろさと、歴史や比較的視点への着目といったアプローチのおもしろさ。社会学におけるこの2つのおもしろさを知るための一冊。		

★★基礎

書名	まなざしの地獄 ― 尽きなく生きることの社会学		
著者	見田宗介	刊行年	2008年
出版社	河出書房新社	価格	1,296円
コメント	1973年初出の有名論文を単行本化したもの。新たに付された大澤真幸氏の解説と併せて読むと、理解がしやすい。 4人を射殺した犯人として1969年に逮捕された19歳の少年N・Nを手がかりとして、当時の日本社会を分析している。ある人間・ある事件を、例外事例としたり個々の内面の問題として扱うのではなく、その人間が置かれている諸関係や社会構造という観点で読み解くその手つきから、社会学という学問がどのようなものか、考えることができるだろう。「統計的な事実の実存的意味」「実存的な諸事実の統計的意味」という表現が登場するが、事例とデータの関係についても、注目してほしい。 この本をきっかけに社会学を学ぶのであれば、社会学について順を追って丁寧に考える文体の『社会学入門一歩前』(若林幹夫)や、オーソドックスな社会学の領域を押さえている『社会学講義』(橋爪大三郎／大澤真幸他)などを手にとってみるとよい。		

★★基礎

書名	社会調査のウソ ― リサーチ・リテラシーのすすめ		
著者	谷岡一郎	刊行年	2000年
出版社	文藝春秋	価格	842円
コメント	大学生であれば、さまざまなデータを探し、読み解き、ときには自ら分析することが求められる。しかし、そのデータのもととなっている調査が、どれほど信頼に足るものか、考えたことはあるだろうか。また、日常的に目にするニュース報道がどのように私たちに情報を提示しているか、普段どれだけ注意して見ているだろうか。 この本は、適切とはいえない調査やその結果を報じた新聞記事をとりあげながら、社会調査の結果を読み解く際のポイントや調査の方法について、より多くの人が読みやすい文体で書かれている。若干古い本だが、多くの人が目にしやすい新聞というメディアを素材としつつも、社会調査の専門的な知識も挿し込んでいる点で、バランスがよい。ただ、『社会調査法入門』(盛山和夫)や『入門・社会調査法[第3版]』(轟亮・杉野勇編)などの、社会調査に関するオーソドックスな教科書も手にとりつつ、社会調査について学ぶべき項目を体系的に把握しておくことも同時に必要。		

★★基礎

書名	異文化コミュニケーションワークブック		
著者	八代京子ほか	刊行年	2003年
出版社	三修社	価格	2,800円
コメント	異文化コミュニケーションは国籍が異なるとき、外国人と接するときだけに起こるのではなく、日常生活の中にもあふれている。本書は異文化コミュニケーションが、ますます日常化していく中で、スムーズなコミュニケーションを行うために必要な能力は何かについて分かりやすく説明しています。たくさんのエクササイズがありますから、それらを通して、自らの異文化コミュニケーション能力を試してみるのも楽しいでしょう。		

★★基礎

書名	開発政治学入門 途上国開発戦略におけるガバナンス		
著者	木村宏恒、近藤久洋、金丸裕志	刊行年	2011年
出版社	勁草書房	価格	3,000円
コメント	途上国の開発問題の要因はさまざまあり得るが、途上国の国としての政治のあり方や政府の政策と対応能力、すなわちガバナンスが開発に大きく関わっているというのはもはや国際的に広く認識されるところである。冷戦時代の地政学的政治配慮の優先や「内政不干渉の原則」のもと、それまで取り上げられることのなかった途上国のガバナンスのあり方は、1990年代以降、途上国の独裁政権や汚職の問題、民主化の動きなどの中で「開発を可能とする環境」、「開発の前提条件」として取り上げられるようになり、今や国際開発の議論の中では欠かせないトピックとなっている。「ミレニアム開発目標」や「持続可能な開発目標」で強調されている途上国のオーナーシップも、開発目標達成に向けた途上国のリーダーシップと政策努力を求めている点で、近年のガバナンスの重視と流れを同じくしている。本書は、こうした途上国のガバナンスの問題に焦点を当て、途上国のガバナンスの問題やガバナンスと経済成長や貧困削減の関係、途上国における民主化の課題、平和構築とガバナンスなどについて広く取りまとめたものであり、途上国のガバナンスの問題に関して鳥瞰するうえで役に立つ入門書である。		

★★基礎

書名	アフリカ 動き出す9億人市場		
著者	ヴィジャイ・マハジャン著 松本裕訳	刊行年	2009年
出版社	英治出版	価格	2,200円
コメント	アフリカというと「貧しい」イメージを持つ人が多いと思う。確かにアフリカは開発途上国の中でも他の地域に比べて開発が遅れているのは事実である。しかし、十年一日な「貧しいアフリカ」のイメージだけでとらえていると、今、アフリカで起きている中間層の増加による膨大なニーズと購買力、成長を続ける若年層市場、ITによる新たなインフラやビジネスの台頭、成長を見越した海外からの「頭脳流入」や中国・インド・欧米諸国の積極的な投資といった、新しいダイナミックな動きを見逃してしまうことになる。本書は、そうしたアフリカの新しい新しい動きにいち早く注目して、それをさまざまな側面から具体的な事例をあげつつ記したものであり、発刊とともに、大きな話題にもなった本である。発刊は2009年で今から10年前になるが、ここに描かれた「兆し」が、その後、まさに現在のアフリカでの動きとなっており、著者の眼力にはいまさらながら脱帽するほかはない。いまだにここまでアフリカの新たな動きを捉えた本は日本では書かれていないことや、中国・インド・欧米に比べて日本企業のアフリカ進出が遅れた状況にあることを考えると、アフリカに経済的に強い地盤を持つインドのバックグラウンドを持つ著者であるからこそ書けたものとも思われる興味深い本である。		

★★基礎

書名	『開発を問い直す－転換する世界と日本の国際協力』		
著者	西川潤、下村恭民、高橋基樹、野田真里	刊行年	2011年
出版社	日本評論社	価格	3,888円
コメント	国際開発学会の20周年記念として、会長、副会長、本部事務局長の学会執行部が中心となって編纂。国際開発学の最先端の課題と議論について分析。国際的に高い評価を受け、韓国語でも翻訳出版。		

★★基礎

書名	SDGsを学ぶ：国際開発・国際協力入門		
著者	高柳彰夫・大橋正明編	刊行年	2018年
出版社	法律文化社	価格	3,200円
コメント	SDGs (Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)について、第I部はSDGs各ゴールの背景と内容を明示。第II部はSDGsの実現に向けた政策の現状と課題を分析。大学、自治体、市民社会、企業とSDGsのかかわり方を具体的に提起。国際開発学研究所の泰斗、西川潤名誉教授(早稲田大学、2018年10月2日逝去)の遺稿も収録。		

★★基礎

書名	あなたのまちの政治は案外、あなたの力でも変えられる		
著者	五十嵐 立青	刊行年	2015年
出版社	ディスカヴァー・トゥエンティワン	価格	1,000円
コメント	政府指定のSDGs未来都市である、つくば市の現職市長による「SDGsによるまちづくり」「SDGsの地域展開」を先取りした良書。本書発行当時はまだ、国連SDGs(持続可能な開発目標)はスタートしておらず、著者も市長ではなかったが、その先見性には驚かせられる。舞台は架空の町となっているが、茨城県の某市がモデルと考えられ、そのリアルさには茨城県民であれば、笑いをこらえるのに必死である。		

★★基礎

書名	社会学原論		
著者	宮島 喬	刊行年	2012年
出版社	岩波書店	価格	2,400円
コメント	社会学の王道的な内容、すなわち、「近代」とは何かという問い、行為・相互行為およびそれらと関係・構造との関連についての説明、行為者と社会・文化のかかわりや帰結の追究などをベースに、構成されている教科書である。社会学を、その理論も含め、基礎からしっかりと手堅く学ぶには最適な本である。本書後半の章は、不平等や文化的再生産の問題を研究してきた著者の専門性が反映された内容になっている。		

★★基礎

書名	21世紀を生きるための社会学の教科書		
著者	ケン・プラマー/赤川学監訳	刊行年	2021年
出版社	筑摩書房	価格	1,600円
コメント	イギリスの著名社会学者が執筆した社会学の入門書・教科書の翻訳である。社会学的想像力をもって社会を見つめること、そのための理論、方法について、まとめられている。各章末には、「考えてみよう」という項目でその章に関連する発展課題が記されており、内容理解をもとにした考察のトレーニングがしやすい。原著(Ken Plummer, [2010]2016, Sociology: the Basics, Second Edition, London: Routledge.)もペーパーバックであれば比較的安価で入手しやすく、本書と比較しながら読むと、理解が深まる。		

★★基礎

書名	社会学的想像力		
著者	C・ライト・ミルズ/伊奈正人ほか訳	刊行年	2017年
出版社	筑摩書房	価格	1,400円
コメント	本書は社会学の重要古典の訳本だが、これまでの別の訳者による訳本とは別に、新たに訳され、文庫として手ごろな価格で入手できるようになった。社会学的想像力の意味すること、それをもつにはどのような能力が必要かということ、社会学を学ぶ理由、社会学が個人と社会を橋渡しする学問であるという原点について、本書から読み取ってほしい。		

★★基礎

書名	社会科学系論文の書き方		
著者	明石芳彦	刊行年	2018年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2,200円
コメント	論文は研究に基づいて構成されるが、そもそも研究とは何か、という根本的な部分から説き起こしており、「優れた卒業研究」をやりたい人には必読。自分の考えの正しさを確かめる方法として、定性的分析と定量的分析について平易に解説されている。1年生で分からなくても、読み返しつつ2～3年生になれば理解できるようになるので、マニュアル本として根気よく何度も読んで付き合うとよい。		

★★基礎

書名	戦後政治史 第四版		
著者	石川真澄・山口二郎	刊行年	2021年
出版社	岩波新書	価格	1,040円
コメント	戦後の日本政治の流れを知る上で便利な本です。公務員試験対策にも役に立つはずで		

★★基礎

書名	職業としての政治		
著者	マックス・ヴェーバー	刊行年	1980年
出版社	岩波文庫	価格	640円
コメント	政治とは何かを知る上で必須の書籍です。		

★★基礎

書名	最新版 論文の教室：レポートから卒論まで		
著者	戸田山 和久	刊行年	2022年
出版社	NHK出版	価格	1,400円
コメント	学部生向けに書かれた論文執筆に関する案内書ですが、博士論文まで対応できる内容となっております。ゼミ生たちにも必読書として読ませています、大変好評です。		

★★基礎

書名	数字のセンスを磨く データの読み方・活かし方		
著者	筒井 淳也	刊行年	2023年
出版社	光文社	価格	900円
コメント	数字をそのまま受け入れたり、分析手法に偏ったデータとの向き合い方から脱却し、大学での学問において数字を扱うために必要なことを学ぶために、最適な一冊。		

入門★

書名	成人式を社会学する		
著者	元森絵里子、ハン・トンヒョン(編)	刊行年	2024年
出版社	有斐閣	価格	定価2,640円 (本体2,400円)
コメント	そもそも学問するって何だろう？とか、学問(社会学)するって何だろう？という疑問に様々な分野の社会学研究者が、新入生にとって身近な成人式を題材に多様な見方を提示してくれる。学問で面白い！と思わせてくれる優秀な社会学の入門書。		

入門★

書名	文章力の基本 簡単だけど、だれも教えてくれない77のテクニク		
著者	阿部紘久	刊行年	2009年
出版社	日本実業出版社	価格	定価1,430円
コメント	改めて考えてみるとあたり前だけれど、自覚できていない文章執筆の注意点が理解できる。高校までに文章を書くトレーニングを十分に積んだという確信がない場合、まずは本書を読むことから始めてほしい。		

入門★★

書名	リサーチ・クエスチョンとは何か？		
著者	佐藤郁哉	刊行年	2024年
出版社	筑摩書房	価格	定価1,056円
コメント	大学で自ら研究をする際に重要となるのは、適切な問いを立てられるかどうか。自ら疑問をもつことと研究の問いを立てることの重なりと重ならなさなどについて本書で学ぶことが、大学での研究の第一歩として重要だろう。		

基礎★

書名	社会学入門一歩前		
著者	若林幹夫	刊行年	2023年
出版社	河出書房新社	価格	定価1,980円
コメント	いわゆる教科書的な書き方で社会学が説明されるのではなく、社会学が身近な学問であることを、日々の生活とのかかわりから読者が自ら理解できる本書き方がされている点が、本書の魅力である。		

基礎★★

書名	論文の書きかた		
著者	佐藤健二	刊行年	2024年
出版社	筑摩書房	価格	定価1,320円
コメント	本書は、「こうすれば論文を書ける」といったいわゆるハウツー本ではない。論文とはどういうものか、社会学での論文の書きかたを念頭に、論文とはどのようなものか改めて考え、論文の方法的規準や作法に再帰的に迫ることを試みている。		